
炎の魔剣

来夏竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

炎の魔剣

【Nコード】

N7600M

【作者名】

来夏竜

【あらすじ】

【冒険者エレイドと黒猫ダットの物語】 二作目

旅先で見つけた、二つに折れた剣。その修理を魔術師のジェシカに頼みに行ったまではよかったものの・・・

冒険者の青年エレイドに口の悪い黒猫ダット。そこに天然魔術師ジェシカが加わり、今回は一振りの剣をめぐって大奮闘！

プロローグ

前章では魔力を物に定着させる方法について陳べてきたが、この章ではその応用について語ろうと思う。応用は大まかに三つの分野に分ける事が出来る。

まず第一に、もともと魔力を持った物に、新たな魔力を定着させる方法。これはたいていの場合、魔術器を造りだすのを目的としている。材料がもともと魔力を帯びているため、三つの応用の中では比較的手間のかからない応用ではある。

そして第二は魔力を持たない物に、魔力を定着させる方法。日用品から、儀式の魔術具などその用途は幅広い。その幅広さから一般的に『魔術』と認識されているもの、と言っても過言ではないだろう。魔術師本人の魔力に関係してくるため、『簡単』『難しい』などと言言に言えないところが、この応用の奥深さを表しているかもしれない。

そして第三は武器への応用。この方法は第一、第二の応用を含んでいるので、きわめて難易度が高い。魔術的な問題だけではなく、技術的な問題もあるため、一番手間も時間もかかる応用だといわれている。簡単に言ってしまうと、良い魔術師だけでは良い魔術武器は出来ず、かと言って、良い武器だけあっても魔術師の力が同等でなくては、良い魔術武器は出来ない。力のある魔術師、そして腕のある鍛冶屋の両者がいて、ようやく魔術武器ができるのだ。

第一章 魔術師ジェシカ

扉をノックしようとした腕を降りげた瞬間、中から悲鳴が聞こえてきた。それに続く何かが割れるような音や何かが床に落ちるような音。

「落ちたな」

「ああ」

肩に座る黒猫、ダットのもっともすぎる一言にエレイドは苦笑しながら、振り上げた腕をそのまま下ろし、ドアノブに手をやった。ノックをしても今の状態では、あいつは気付かないだろう。

中に入るといろいろな物が目に、そして鼻につく。窓際には薬草が干してある。壁の棚には薬品の瓶がギッシリとならび、部屋中央を陣取っている机の上には書物が山積みになっている。そして二階へ続く階段の辺、もっと正確に言えば、埃がたっている中心に、ここに住人が座り込んでいた。

「眼鏡、眼鏡はどこですか？」

「バカだ」

手探りで眼鏡を探している彼女に呆れたのか、ダットは青年の肩から飛び降りると、落ちていた眼鏡をくわえ、彼女の手の上に置いた。彼女は眼鏡を受け取り、満面の笑みでダットを抱きしめようとする。「あつダットさん。ありがとうございます」

ダットはあわてて彼女の腕をすり抜けると、しゃがみこんでいたエレイドの背中を駆け上る。

「おっと」

バランスを崩しそうになるエレイドと目が合った彼女は、ゆっくりと眼鏡をずり上げる。

「あ、エレイドさんもいらしていたんですか？」

きょとんとした顔をする彼女を見ながら、エレイドは苦笑する。

「お前な……」

この女性はジェシカ。とろく見えて、実際とろい。でもこう見えて、王国魔術師の一人というから嫌気がさす。

「相変わらずのど近眼だな。お得意の魔術で直さないのか？」

「だって。失敗したら怖いじゃないですか」

「この王国魔術師が、何を言う」

と、エレイドは彼女のおでこをつつく。ジェシカは大げさに避けようととして、しりもちをついた。エレイドは笑いながら立ち上がると、手を差し出す。

「ありがとうございます」

ジェシカは立ち上がると、服の埃を払った。

「エレイドさん達、何かご用ですか？」

「用がなければ、こんな所には来ない」

と、ダットがすかさず口を曲げる。

「ひどいです、ダットさん」

「まあまあ。用があるのは確かなんだから」

エレイドは二人をなだめる。

「そうですか。だったら奥で待っていてください。折角なので、お茶でも入れますね」

と、動き出そうとするジェシカ。が、床においてあった箱につまづき小さな悲鳴を上げる。次は机の角に服の裾を引っ掛け…

「大丈夫か…」

心配そうに見守るエレイドを横目に、ダットは一言面倒そうに呟いた。

「ほっとけ」

「あんなにガチャガチャやっていて、よくこんなうまい紅茶がいれられるな」

エレイドは正直な感想を陳べながら、カップを口元に運ぶ。横目で見ると、ダットも満足そうに少しさめた紅茶を小皿から飲んでいる。「ありがとうございます。薬草学は専門ではないのですが、お茶は

昔から好きで。研究室の方でも評判はいいんですよ」

ジェシカは少し照れたように、頬を赤らめた。

「それにしてもよく私が家にいると、わかりましたね。この時間は研究室にすることが多いのに」

「その研究室に行ってきたからな。カイルさんにお前が休暇を貰ったと聞いたから、こつちへ来てみた訳だ」

「そうでしたか。それで用件というのは？」

「実は見てもらいたいものがあつてな・・・」

エレイドは荷物から包みを取り出し、解いていく。

「壊れた剣ですか？ いやですよ、武器の修理は。ダンさんの所にも行ってくださいよ」

中身が見えた途端、ジェシカが嫌そうな顔をする。中身は二本に折れた剣。剣身の真ん中辺りで折れている。

「お前の目は節穴か？ よく見る」

「えっ？ じゃあ、エレイドさん、ちよつといいですか？」

「ああ」

ダットが不機嫌そうに口を挟む。彼の反応に興味を持ったのか、ジェシカは折れた剣を丹念に調べ始める。刃をそつと持ち上げたり、柄をひっくり返したり。そして満足したのか、ジェシカはそつと剣を元の場所へ戻した。

「なるほど、だから私の所に来たんですね？ これ、どこで手に入れたのですか？」

「この前ジスタルまで行ってきたんだ。その帰りによつた古道具屋で見つけたんだけど... やっぱダットの言っていた通り、これって魔剣なのか？」

「正式名称は『魔術武器』ですけどね。ジスタルですか... ちよつと待ってください」

そう言つてジェシカは後ろの本棚から分厚い一冊手に取ると、パラパラとページをめくりだす。

「ジスタル... ジスタル。あ、あつた。やっぱり、そうだ」

「一人で納得していないで、教えてくれないか？」

「あつすみません」

本を机に置く。そのページは地図だった。

「えっと、ジスタルの辺りに遺跡が多い事は知ってます？」

「ああ。今回の仕事も遺跡関係だったしな」

地図を指差しながら、ジェシカは説明していく。

「ここにカスタリア宮殿跡、こっちはジスタル神殿跡、そこはソール遺跡」と大きなところを挙げるだけでも、七箇所です。大体が五百年ぐらい前に栄えた、ナルガ文明の物です」

今度は折れた剣の柄を手にとると、エレイドに渡した。

「消えかかっている、ちよっと見にくいのですが、ここに文字が彫つてあるのがわかります？」

エレイドは数度見る角度を変えると、ようやくそこに文字が彫つてあることがわかった。

「それはナルガ文字だ。今の魔術文字のもとにもなっている」

「私が説明しようと思ったのに」

不服そうなジェシカは気にせず、ダットは大きくあくびをすると丸くなった。

「まあダットさんの言うとおりです。この剣からは魔力はほとんど感じられませんが、ナルガ文字、それに材質からして魔術武器の可能性は高いです。剣のことは良くわかりませんが、剣としても良いものなんではないですか？手に入れたところもジスタルと、場所も場所ですし」

「直せそうか？」

「まあ、術式を一回解いて、折れた部分と融合しなおす……って感じですか？出来ない事はないですが、時間、かかりますよ？」

「別に構わないさ。当分は王都にいる」

「じゃなくて」。『私』が『休暇』を『エレイドさん』のために使うんですよ？」

「わかった、わかった。何が欲しいんだ？それとも何かに付き合え

と？」

「当たり前です。今度カインドで薬草市があるので、そこに付き合ってください。もちろんエレイドさんのおごりで」

と満面の笑顔。この女、とろそうに見えて、実際とろい。でもこういう事だけはなかなか計算高いから始末が悪い。

「わかった。付き合う。付き合うから、直してくれるな？」

「わかりました。これはお預かりしますね」

「ダット、帰るぞ」

答えが帰ってこないのを見ると、ダットは眠り込んでいる。

「しょうがないな」

ため息をつきながらエレイドはダットをそつと抱えあげる。そしてジェシカに別れを告げると、家を後にした。けれど約十二時間後、エレイド達を含む王都ドレイク東地区の住民たちが、まさか爆発音で寢床から追い出される事になるうとは、エレイド達はその時、思ってもいなかった。

第二章 暴走

条件反射的にエレイドは飛び起き、手は無意識に立てかけておいた剣に触れる。

「なんだ？今のは…」

窓を開け放ち、顔をだす。外を見るとあちらこちらに明かりが点き、通りは心配そうに家から出てきた人たちで溢れている。

「なんだ？」

「凄い音だったわよね」

「どうした？」

「お宅、揺れなかった？」

聞こえてくる会話の断片。誰も詳しい事はわかっていないらしい。耳を傾けていると、ダットが屋根から下りてきた。

「支度しなくていいのか？」

「さっきの音は何だ？」

「多分、あのバカの所からだ」

ダットの言葉にエレイドはあわてて用意をする。ダットが肩に飛び乗ると、エレイドは階段を駆け下り、道へと飛び出した。

「おっと」

「すいません」

人にぶつかりそうになりながら、間をすり抜けていく。

「おいっダット。何があった」

「さあな。音が聞こえる前に、光が見えた。魔力の波動も少しだが感じた。それにしても、あの規模の爆発とはな…あのバカにしては珍しい」

少し考え込むダットを横目に、エレイドは大通りを右に曲がった。突き当りを左に曲がれば、ジェシカの家だ。

「まあ、本人に聞くのが一番早いだろうな」

ジェシカの家の前に着くと、そこは案の定、人だかりが出来ていた。野次馬たちを警備兵が押し戻そうとしている。

「はあ。やっぱり野次馬だらけか…」

突然ダットが飛び降りると、逆方向に走っていつてしまった。

「おい、ダット！」

すぐに姿が見えなくなってしまう。

「はあ。しょうがないな…」

ダットの事はあきらめて、エレイドは人ごみの中に入っていく。人を掻き分け、どうにか先頭にたどり着くと、ダットがいなくなったわけもすぐにわかった。ジェシカの家壁には大きな穴があき、近くの塀は少し崩れている。そしてその前に一人の男が立っていた。

「おいっ野次馬は帰れ！」

警備兵に押されながら、見知った人物に声を掛ける。

「カイルさん」

「おい、お前！」

「カイルさん！！」

ようやく気付いてくれたのか、法衣を着た男性が振り返った。彼の名前はカイル。ジェシカの上司。研究室の室長をしていて、王国魔術師のリーダーでもある。ダットは何故かこの男が苦手らしく、彼の前には姿をあらわそうとしない。彼はエレイドの顔を見ると、呆れたように首を振った。

「その人は通してあげなさい」

「はっ」

エレイドが通されると、カイルは困ったようにため息をついた。

「やっぱりあなたですか、エレイドさん。あなたも、ジェシカも、いつもいつも、厄介事ばかり…」

「ジェシカは？ジェシカは大丈夫ですか？」

「彼女なら中で、ボあーっとしていますよ。着いてきてください」

中に入ると、状況は外より悲惨だった。昼間来た時の様子とは比べ物にはならない。棚は倒れ、書物は散乱し、机が壊れている。そんな中、階段の脇にジェシカが一人で座っていた。

「ジェシカ、大丈夫か」

エレイドが声を掛けると、ジェシカは駆け寄ってきて、ポカポカとエレイドを叩き始める。

「全然、大丈夫じゃありませんん！」

「おっと、おちつけって。『お前』は大丈夫なのか？」

「だから、大丈夫じゃありませんって！」

「怪我したのか？」

ジェシカは叩くのをやめると、自分の服の裾をつかんだ。

「服が少し…焦げました」

エレイドはほっと息をついた。

「とつさに防御壁でも張ったのでしよう。でもあの規模の爆発で、服が焦げるぐらいですむとは、さすがですが…」

ため息がちにカイルはジェシカを誉めた。続く言葉に身構えるように、ジェシカは小さくなっている。

「お二人には聞きたいことも、聞きたくないことも、たくさんあるのですが…それはまず後回しにしましょう。ジェシカ、あなたの休暇はいつまでですか？」

「…明後日…というか、もう明日ですね。時間的に…」

「じゃあ三日。三日、あなたの休暇を伸ばします。その間にこの厄介事を片付けてください」

「でも、私が休んでも大丈夫なんですか？発表も、もうすぐですし」

「しょうがないです。私は発表より、あなたたちの厄介事を野ざらしにしておくほうが怖いので…。発表のほうはナークに頼んで、彼の休暇を少し先に延ばしてもらいましょう。だから必ず三日内にこの厄介事は片付けるように。言い訳も報告も後から聞きます。エレイドさんもいいですね？」

「はっはい」

エレイドは慌てて返事をする。カイルは普段は物静かな男だが、怒らせると怖い。

「ここは私が片付けますから、今晚はギルドのほうでお世話になってください。いいですね？」

有無を言わず、家から追い出されたジェシカとエレイドの行動について語る前に、王都ドレイクのギルドについて説明しておこう。ここ王都では、ギルドの証である、双頭の鷲の看板が掛かっている場所が三箇所ある。中央区のギルド本部、東区の宿屋『鷲の爪』、そして西区の宿屋『獅子の咆哮』。中央区にあるギルドは名前の通り、ギルドの本部。国全体のギルドに関する情報が集まってくる。新しく冒険者になりたい場合、本部で試験を受け、受かった場合のみ冒険者として登録される。東区と西区にあるギルドは、他の町にもあるギルドのように宿屋と兼業のギルド。表向きは普通の宿屋だが、実際は両方とも、多数の冒険者が滞在する、冒険者の宿となっている。エレイド達も、王都にいた間『鷲の爪』を拠点に行動している。そしてカイルに追い出されたエレイド達が、最終的に落ち着いたのも『鷲の爪』、正確に言えば、エレイドとダットが寝起きしている隣の部屋だった。

空気を入れ替えていると、ダットが窓から入ってきた。

「お帰り、ダット」

「ダットさん、どうして室長を避けるのですか？怒ると怖いですが、やさしい人ですよ？」

「ふん。あの男の全てが嫌いなだけだ」

「そんなの…」

ダットの機嫌がもつと悪くなる前に、エレイドは言い返したげなジェシカを遮った。

「それでジェシカ、今晚一体何が起きたんだ？」

一瞬ジェシカは不満そうに口を尖らせたが、ゆっくりと話し始めた。

「エレイドさん達が帰ってから早速作業をしようと思って、準備をし始めたんですよ。実際作業をし始めたのが、だいたい夕方。術式を解くのは、問題なくいったんですが…」

「なるほど、術式と折れた部分の融合の時か…」
ダットが納得したように呟いた。

「融合は成功したんですが、その瞬間あの爆発ですう…」

「暴走したんだな。原因は何だ？術式でも間違えたか？」
ダットの言葉にジェシカは口を曲げる。

「私は間違えてはいません！推測ですが、もともと術式がずれていたんだと思いますう…。多分、あの術式を考案した人とかけた人も別人じゃないんですか？解いてみてわかったんですが、術式は丁寧に作ってあるのに、掛け方がちよつと乱暴でした。だからあんな所で折れちゃったんじゃないですか？」
ダットは考え込むかのように目を細める。

「今度は噛み合いすぎて、暴走か…？魔力が必要以上に定着してしまった可能性もある。ずいぶんと厄介だな…」
「ですよね」

頼杖をつきながら二人の話を聞いていたエレイドは、不機嫌そうにうなった。

「二人で納得してないで、俺にもわかるように説明してくれ」

「あつすいません。あつそうだ。説明にはこれを使いましょう」

ジェシカは飲んでいたグラスを空けると、テーブルの真ん中に置いた。

「これが、エレイドさんが普段使っている剣だと思ってください。エレイドさんの剣は魔術武器ではないので、魔力はないですよね？この空のグラスと同じです」

ジェシカは瓶を手に取ると、グラスにゆっくりと水をつぐ。七文目

ぐらいまで注ぐと、瓶を置いた。

「これが通常の魔術武器の状態です。魔力は満タンではありません。まだ余裕のある状態です」

「どうしてだ？満タンのほうが武器の威力があがるんじゃないのか？」

エレイドが疑問を口にする、今度はダットが説明を続けた。

「理論上はな。実際、最初の頃はそうやって作られていた。だが、そんな武器を使いこなせるような奴がいなかったんだ。使い手が武器を使うのではなく、武器が使い手を振り回した。俗にいう、呪いの武器ってやつさ」

「だからこういう余裕のある状態にしたんです。足りない部分は使い手が補えば、武器は十分応えてくれます。使い手の能力にあった使い方ができるようになったんです」

「なるほど。けど今回の事と、どうつながるんだ？」

「さっき、術式がずれていた、と言いましたよね？つまりはこういう事です」

ジェシカが触ると、グラスが不恰好にゆがみ始めた。

「歪んでいたという事か？」

「ええ。こういう形だと、どうしても弱い部分も出てきてしまいます。だから折れてしまったんです。けど材質は凄くいいものなので、かなりの魔力が馴染んでしまっていたんです。私でも融合の時まで気付けませんでした」

気付けなかった事に気落ちしているのか、ジェシカの表情が曇る。

「つまり？」

ジェシカがもう一度グラスに触ると、グラスは見る見るうちに元の形に戻っていく。

「私が術式を掛けなおした事で、歪みも直りました。それだけだったんですよ、注ぎ足してしまっただけです。空だと勘違いしたまま」

ジェシカはそう言いながら、水をグラスに注ぎ足していく。水はど

んどん増え、ふちまで達し、そして溢れた。

「なるほど。今晚の爆発は溢れた時に、起こったものなんだな？」

「あたりです」

「だが厄介なのが、ここからだ」

「どういことだ、ダット？」

「つまりですね。あの剣は爆発の時、見失ってしまいました」。

でも状況は今とあまり変わっていないと思ってもいいと思います」

「水が溢れるか、溢れないかギリギリの状態だ」と、ダットが付け加える。

するとジェシカはいきなり机を叩いた。グラスが揺れ、水が零れる。
「少しは安定しているはずですが…こんな感じに、いつ、どこで、何がきっかけでまた爆発するか、わかりません」もし、あの剣がこの王都のどこかに…」

エレイドは冷たいものが背筋を走るのを感じた。

「確かにそれは、厄介だ…」

「どうしましょう、エレイドさん？」

エレイドは前髪を掻き揚げる。考えるときの癖だ。そして立ち上がる。

「俺はギルドを周って情報を集めてくれるよう、頼んでくる。作戦会議はその後だ。お前は俺が戻るまで、少し休め」

「えっでも」

「疲れていては、いい考えも浮かんでこないだろう？」

「わかりました」

そう言つてエレイドは後ろ手で扉を閉めると、廊下に出た。そして深くため息をつく。

「長くなりそうだな」

そんなエレイドの言葉に、ダットはまるで面白がるかのように目を細めた。

第三章 手がかり

「はあ。いちおう頼んではきたが…」

そんな事を思いながら、エレイドは『鷲の爪』の扉に手をかけた。辺りは明るくなり、小鳥たちの歌声が朝の訪れを告げている。ギルドに入ると、すでに何人かの客たちが朝食を取っていた。隅にジェシカが座っているのを見つけると、エレイドは向かいの席に腰を下ろした。

「だいぶ眠そうな顔をしているぞ。これでも飲んで、目を覚ませ」

そんな様子を見ていたのか、ギルドの主人がコーヒーを持ってきた。

「どうも。親父さん…」

「残念だが、情報はまだ入ってきていないぞ」

それだけ答えると、主人はまたカウンターに戻ってしまった。

「どうでした、エレイドさん？」

ジェシカはフォークをそつと置き、心配そうに聞いてきた。

「まあ、ここの主人に頼んだのは知ってるな？あとは『獅子の咆哮』のギルドマスター、本部の人間、俺の知っている情報屋。何か情報があれば、こつちにまわすように頼んできた。けど、正直ちよつと不安なんだよな…」

情報といつてもあの爆発騒ぎ以外、手がかりはないに等しい。

「あの剣の事でちよつと思いついたことがあるんです」

コーヒーが入ったカップを口元に運んでいると、ジェシカが考えこみながら呟いた。

「正確には術式で気になったところがあつて…。そうだ、作戦会議は私の家でしましょう？ダットさんの意見も聞きたいし」

答えの代わりにダットは大きく欠伸をした。いつもの事だが、やる気があるのかないのか、いまいちわからない。

「って言ったって、お前の家、夜中の騒ぎでボロボロじゃ…？」

不思議そうにエレイドが聞くと、ジェシカは自信満々に答えた。

「大丈夫ですよ。室長が片付けると言ってくれたので、多分私が片付けた時より、ちゃんとしていると思いますよ?」

理解できずにいるエレイドをジェシカは笑顔で促した。

「さっ行きましょう?」

「たしかに片付いている…」

家は確かに片付いていた。壁にあいていたはずの穴は塞がり、全然見分けがつかない。ひっくり返したようになっていた室内も、掃除、整頓され、ジェシカが予想した通り、昨日の昼に訪れたときよりも綺麗になっている。

「これも魔術なのか?」

「室長のは特別ですよ。はあ、室長やりすぎですよ。あれどこにしまわれたかな?」

文句を言いながら、何かを探し始めるジェシカ。そんな様子を見守りながらエレイドは近くの椅子を引き寄せた。

「なあ、ジェシカ。こんなに悠長にしているいいのか?」

「えっ?」

ジェシカは振り返って、探す手を一瞬止める。

「いや、あぶなくないのか?」

「エレイドさんって結構心配症なんですわ」

ジェシカがクスクスと笑う。

「昨日は私も慌てていて、あんな風に言いましたけど、そこまで心配するほどじゃないと思いますよ?術式はしっかりかけましたし、魔力がなじみ易い材質みたいですしね。まあ危ないのは変わらないと思います。いろいろな意味で…」

「いろいろな意味で…か」

ジェシカの言葉に苦笑する。

「ありました」

そんな声と共にジェシカは紙束を取り出してきた。

「まったく、整頓されすぎてて、どこに何があるのか…室長に頼むとそれが困ります」

「お前がきちんと片付けないからだろう？」

「私がわかれば、いいんですっ」

ダットのつつ込みにジェシカは口を曲げる。エレイドは話題がそれる前に口を開いた。

「でっそれは？」

紙には沢山の記号や紋章が描かれ、書き込みがびっしりとされている。興味を覚えたのか、ダットは立ち上がり覗き込んでいる。

「これ…あの剣の術式の写しですっ。術式を掛け直しているときは気付かなかったんですが、ここが、ここが」

エレイドは一目見て、椅子によりかかった。

「考えるのはお前らに任す」

「誰もお前には期待なんかしていない」

ダットの一言。

「はいはい」

ジェシカが指差した場所をダットはじつと見つめている。

「どう思います、ダットさん？」

「これは胴体だよな…？頭はどうなっている？」

ダットの問いにジェシカは紙束の中を探し始める。

「えっと、ちよっと待ってください。ありました。これです。これも、ここと、あっここも…えっと全部で5箇所ですね」

ダットは無言で、術式が書かれた紙の上を歩き回りながら見つめている。ダットはあまり表情を出さないほうだが、かなり驚いている様子だ。

「良く隠してある。まさかこんな術式になっていたとは…」

「これであの剣がいそうな場所が狭まりましたよね？」

ジェシカが笑顔になる。

「候補は六ヶ所って所か？」

「多分五箇所です。城は、ないですよ」

「たしかにあの男がそんなへまをするとは、思えないな。それにしてもこの化け物だ、この魔術師」

「それなんですよね。一体誰、なんでしよう？これだけの術式なのに、銘が見当たらないんですよ…。方式もナルガ魔術の流れを組み込んでいるものの、大体が独自の方式です。これだけの術式を組める魔術師は大体知っているつもりでしたが、思い当たらないんですよ…。今度王立図書館で少し調べてみます…」

「結論がでたなら、そろそろ凡人にも分かる様に説明してもらえると助かるのだが…」

エレイドの声にまるで思い出したかのように、ジェシカが顔をあげた。

「そうでしたね。えっと、結果から言えば、あの剣がいそうな場所は五箇所です」

「ちょっと待て。いる？五箇所？何故そう言いきれん」

戸惑うエレイドに、ダットが小さくあくびをする。

「こいつは無知だから、一から説明してやったほうがいいぞ」

「どうせ俺に魔術の事はわからないさ。どこかの博識な猫様と違って、俺は無知なもので…」

エレイドの言葉に、興味なさそうにダットは丸くなる。

「まったく…」

「まあまあ」

ジェシカが苦笑しながら、エレイドをなだめる。

「そうですねえ。始めるとしたら、魔術武器かなあ？エレイドさん、魔術武器について、どの位ご存知ですか？」

「昨日お前が話してくれた程度だ」

「そうですねえ。えっと魔術武器を作るとき、過程は二つあります。まず鍛冶職人さんが武器をつくり、そして私たち魔術師が術式をかけて、魔力を武器に定着させます。たいていの場合、私のように、

物質の構築が専門の、魔術師がそれを行う事が多いですね」

エレイドは無言で頷いた。

「でっ今回も、変な言い方ですが、火属性の、普通の魔術武器だと思っっていたんです」

ジェシカは人差し指で自分の顎を軽く叩き始める。考えこんでいる証拠だ。

「どういう意味だ？」

「この剣の場合、術式がとにかく特殊なんです。えっと属性の事は…」

「ばかにするな。属性ぐらいは知ってる。木、火、土、金、水の五つのことだろ？」

ジェシカはにつこりと笑い、近くの引き出しから白い紙を取り出すと、まず円を描き、中に五角形を描いた。そして角に属性を書き込んでいく。付け加えるかのように、隣に人の落書きのようなものを書いた。

「術式はこのように、『頭』、『胴体』、『脚』、と人間の身体のように見立てます。そして術式を安定させるため属性を一つ選び、それを元に術式を組んでいくのが一般的なやり方です」

「なるほど」

「ここでこの術式の一目の特殊なところなんです。あの剣の術式は、属性を一つに絞っていません。五つすべての属性を元に作られているんです。属性を増やす事は理論的には難しい事ではありません。でも安定させるのが難しいんです、互いに打ち消しあってしまいますから…。私でもすぐに出来るかどうか…」

そう言っつて、ジェシカは五角形の角をそれぞれ線で結ぶ。五本の線で、一つの星が五角形の中に浮かび上がる。

「でもあの剣の術式は安定していました。それもほとんど独自の方式で…。問題があったのは、あの乱暴な掛け方だけです」

「それだけ魔術武器を造るのは難しいという事だ。術式自体しっかりしていても、かける時、少しでもずれがあれば武器の質に作用し

てしまう」

と、ダットが付け加える。

「これだけ術式がしっかりしていて、掛け方が粗かったというのも気になるんですけど…この術式にはもう一つ、不思議な点があるんです」

「というところ？」

「五属性全てを元に作られている、と言いましたよね。でも一目見ただけでは、火属性にしか見えないんです」

「どういう意味だ？」

ダットはゆっくりと立ち上がると、術式が書かれている紙の上を歩き回りながら呟いた。

「全てに属している事を隠している。それもかなり巧妙にだ。それなりに知識がないと、火属性にしか見えない」

「五属性全てを安定させるだけでも難しいのに、それを隠して火属性に見せるのは…」

ジェシカがまた考え込む。ため息がちにエレイドは前髪を掻き揚げた。

「そろそろ頭が痛くなってきた。要するになんだ？あれは実はほんでもない剣だったという事か」

「要約するとそういう事になる。俺には剣その物の質はわからん。だがこの術式を組んだ魔術師は、とんだ化け物だ」

ダットの黄色い眼がまっすぐとエレイドを見つめる。

「珍しいな。お前がそこまで言うなんて…っで、その術式と剣の場所がどうつながるんだ？」

「重要なのは術式そのものより、属性の方だ。属性は魔術では基本中の基本だ。もちろん魔術武器の術式以外でも幅広く使われる。エレイド、六番目の属性の事を知ってるか？」

「六番目？属性は五つじゃないのか？」

エレイドの戸惑いに、ジェシカがもう一度紙に属性を書き出した。

「六番目の属性は『光』と『闇』です。表裏一体のため、一つの

属性として扱われます」

円を描き、五角形を描き、角を線で結ぶ。

「基本はいつもこの形です。そしてこの真ん中を『光』に定めるか、『闇』に定めるかによって、効力も変って来ます。『光』だったら『守』、『闇』だったら『攻』。この『守』の形ならエレイドさんも毎日見ていますよ？わかります？」

ジェシカがめがねをずりあげ、口元に微笑みを浮かべる。エレイドが話の流れが見えずにいると、ダットがイライラしたように続けた。

「ここ、王都の事だ。自分が拠点とする場所の事ぐらい、知ってる」
「魔術を少しでも知っている人間には常識かも知れませんが、まあ一般的にはあまり知られていないことですから」

彼女はそう言うのと今度は王都の地図を取り出してきた。

「説明がかなり長くなってしまうましたが、全部今回の件といろいろつながるんです。まず今回の件はいろいろ特殊です」

エレイドはうんざりしたように、唸った。

「術式の事だろ？それともまだ、あるのか？」

「それもありますけどお、暴走して消えてしまったというのが、最大の問題点です。暴走までいったら、武器が耐え切れなくなり壊れてしまう事がほとんどです。それが消えてしまったという事は、いちおう魔力が定着したと考えて間違いないと思います」

「王都は『守』の形を基礎に造られた都だ。だから街中にはいたるところに魔力の流れがある。剣が消えたという事は、その魔力の流れに飲み込まれた可能性が高い」

ダットは一呼吸おいて、続ける。

「そして魔力が流れ着く先は、要である属性の祠、六ヶ所」
ダットの言葉にジェシカは順々に指差していく。

「木、火、土、金、水、そして光。理論上はこの六ヶ所です。でも実際はこの五箇所の内のどこかにいると思いますよ、あの剣」

そう言うジェシカは鉛筆で『光』を除いた五箇所を丸く囲った。

「何故、光はいいんだ？可能性としてはあるんだろう？」

その言葉にジェシカは『光』の場所をトントンと指で叩いた。

「エレイドさん、ここはどこですか？」

「……？城だろ？」

「ええ。ここの『光』を担当しているのは、室長です。『あの室長』が城に何かを侵入させると思っています？」

非常に単純で、明白な答えだった。

第四章 火の祠

「認めるのは癪だが、あの男に限ってそんなへまはしないな」

ダットの言葉にエレイドは頷いた。王国魔術師は奇人が多いが、優秀な人材ばかりだ。まあ、時には奇妙を通りこして、変人な事も多いが……。そんなメンバーをまとめるカイルがそう簡単にへまをするわけない。ただでさえスキを見せない男だ。

「でっこれからどうする？」

「そうでっすね。室長に言われた期限は今日を入れて四日。今から一番近い、火の祠に行ってみましょう？残りの四つは三日で十分周れます」

ジェシカを家を出て三十分。城壁を抜け、また三十分。街道からはずれた、森の奥の、少し開けた場所に来ると、ジェシカは立ち止まった。

「こりゃあ、知らなきゃ来れないな」

そんなエレイドの呟きにジェシカはクスリと笑った。

「知っていても、そう簡単には入れませんよ」

ジェシカはふとひざまずく。エレイドは不思議そうに肩越しに覗くと、地面に石版が埋めこめられていた。

「それは？」

「ここが入り口です。エレイドさん、そこを動かさないでくださいね？」

そう言っていると、ジェシカは近くにあった枝を拾い、地面に何かを書き始めた。

「でっきました」

枝を置くと、ジェシカは石版に触れた。

「うわっ」

エレイドは一瞬、地面が揺れたような気がした。でも一瞬だけ。気がつくとエレイドたちは小さな部屋の中にいた。エレイドが目を丸くしていると、ジェシカがいたずらっぽく言った。

「ここが、火の祠の本当の入り口ですよ」

「ここが？」

そう言われて、エレイドは改めて辺りを見回してみた。明らかに地下なのに、なぜかぼんやりと明るい。見回しても松明のようなものは見当たらない。

「さっ、祭壇はこの奥です。剣がいるとしたら、そこですね」

ジェシカについていきながら、エレイドはふと疑問に思ったことを口にした。

「なあジェシカ。剣が見つかったらどうするんだ？今まで剣の行方の事しか話していなかったが…」

その言葉に、若い魔術師はバツが悪そうに立ち止まった。

「それなんですよねえ。普通だったら余分な魔力を発散させて…とっていただんですけど…」

「このバカの話聞く限り、意外と魔力が定着しやすい材質みたいだから…。実際の剣の状態を見ない限り、対策が立てられないって事だ」

と、ダットが続けた。

「よくわからない答えだな…」

「それだけ、すごい剣だという事です」

「それだけ、厄介な剣だという事か…」

なぜかうれしそうなジェシカの横顔を見ながら、エレイドは深くため息をついた。

祭壇はエレイドが想像していたよりシンプルな造りだった。広間のような場所。そして奥の数段高くなったところには、大きな石版が置かれている。

「外れみたいですわね。いちおう、ここに来ていないか調べてみます」

「そんな事、分かるのか？」

「魔力の乱れを探ればわかりますよ。あの剣だったら、来るだけで乱すと思うので。エレイドさんはちょっと待っていてください」

そういうと段を身軽に駆け上がり、ジェシカは石版に触れた。五分钟左右いすると、ジェシカが戻ってきた。

「何か分かったか？」

「ここには来ていないみたいです。早く出ましようか。あまり長くいると、私がここを乱しかねません」

ふと疑問に思ったが、ジェシカが先に行ってしまったため、質問はしなかった。

来た道を引き返し、また外に出た。城壁まで戻ってくると、もうすでに夕方になっていた。

「あまり長く中にいた感じはしなかったが、もう夕方が…」

そうエレイドが思っていると、ジェシカが振り返った。

「エレイドさん、さっき『私が乱す』って言った時、なんだか聞きたそうな顔をしていましたよね？」

「あつ、ああ」

「魔術師にも属性はあるんですよ？ちなみに私は水。だからあまり長くはあそこにはいられないんです。居心地はいいんですけどね」

「なるほど」

頷きながらエレイドはもう一度属性の図を思い浮かべた。全ての属性はつながっている。水は火に対すると有利だ。『乱す』と言うのは、だからだろう。

「だったらお前はどんなんだ、ダット？お前も一応魔術師の分類に入るんだろ？」

「影響ない」

「何故？」

ダットが答えないでいると、代わりにジェシカが答えた。

「ダットさんは六番目ですよ。光と闇は特殊なので、他の属性には直接的な影響はありません」

「わかったような、わからないような……」

「エレイドさん達はそっちですよ。えっと明日、朝、南門で待っています」

言うだけ言うと、ジェシカはエレイド達を残し、帰って行った。ぼんやりと彼女を見送っていると、ダットが小声でささやいた。

「帰らないのか？」

「あっああ」

ダットの声にエレイドも歩き出す。

「まったく……」

エレイドはまた大きくため息をついた。

第五章 水の祠

次の日、エレイド達は土の祠に向った。結果はまた空振り。

今日、午前中は金の祠。けれどそこには痕跡があつたのみ。そして今、水の祠へと向って歩いていった。火の祠、土の祠、そして金の祠。入り口、広間の中に祭壇。そこには何時も大きな石版が置いてあつた。魔術の事はエレイドには分からなかったが、中の構造は何時も同じだった。

「なあ、ジェシカ。俺たちが周った祠に、剣が戻ることはないのか？」

歩きながらエレイドは聞いてみた。

「もちろんありますよ。でも金の祠に痕跡があつたから、次にあの剣が行きそうな所は水か木に絞られます。今から向う水の祠にいたくても、居場所はいぶ絞られます」

「王都の『守』は、強いて言えば魔力の檻だ。追っていれば、何処かで必ず捕まえられる」

そうダットが付け加えた。街道を今度は右に逸れ、ジェシカを先頭にエレイド達は坂を下っていく。獣道を通り林を抜けると、エレイド達は湖のほとりにでた。結構大きな湖だ。真ん中に小島があるのが見える。

「『水』は水の近くって訳か…」

ジェシカが立ち止まり、祠に入る準備している間、エレイドは辺りを見回した。ふとジェシカを見ると、首を傾げている。

「どうした？」

「あついえ、何でもないです」

ジェシカが慌てて、地面に紋様を書き出した。一瞬の揺れ。それでエレイド達はまた、地下にいた。ジェシカはなんだか、辺りを見回している。

「どうした？」

ジェシカが答える代わりに、ダットがピヨンとエレイドの肩から飛び降りた。

「乱れているな」

ジェシカが深くため息をつく。

「という事は…」

「この先に多分あの剣がいます」

ジェシカが先へ続く通路を見据え、呟いた。

「ここはずいぶん長いな」

歩きながらそう言つと、ジェシカが振り返つた。人差し指を天井に向ける。

「エレイドさん、外で湖に小島があるのに気がつきましたあゝ？」

「ああ」

「祭壇はあその地下なんです」

「俺たちは今、湖の下を歩いているわけか？」

エレイドが驚くと、ジェシカはニツコリと笑つた。

「あつたりです」

エレイドは立ち止まり、改めて天井を見上げた。いたつて普通の天井だ。午前中に行った金の祠や、昨日とおといに周った火や土の祠の天井と変わない。

「そういえば、お前は何で、あの剣の事を人間みたいに言うんだ？あの剣がある、じゃなくて、あの剣がいるって」

「それは…キャッ」

ジェシカは小さな悲鳴を上げた。見ると黄色いもやに包まれている。エレイドはとつさに右手を伸ばした。けれどつかんだのは、なにもない空間だつた。

「ジェシカ？」

慌ててあたりを見回す。ふと何かを蹴飛ばしたような気がして、床を見るとジェシカの眼鏡が落ちていた。拾い上げる。

「ジェシカ。ジェシカ！」

彼女の名前を呼んでみるが、返事はない。

「おいっ」

足元を見ると、いつの間にかダットがいる。

「こっちだ」

彼についていく。ダットは数歩ごとに立ち止まり、まるで何かを探しているかのようにあたりを見回す。そしてまた歩き出す。数度その行動を繰り返し、最後には壁の前に立ち止まった。

「ここだ」

「お前の…」

考え違いじゃないのか？そうエレイドは言いかけた。

「隙間・・・？」

「押してみる。普通に開くはずだ」

ダットに言われたとおり、壁を押してみる。石壁のはずなのだが重さを感じさせず、まるで普通の扉のように奥へと開いた。そこは物置のようだった。棚には書物や箱などいろいろと置かれている。そして部屋の隅に、ジェシカもいた。

「ジェシ…」

エレイドは言葉を失った。ジェシカはたしかにそこにいた。問題は彼女が一人じゃなかったという事。ジェシカはその相手に壁に押し付けられ、唇は相手の唇でふさがれていた。最初はジェシカも目を白黒させ、抵抗しようとしていたもの、熱い口づけに負けたのか、相手に身を任せるような形になっていた。

エレイドは頬が熱くなるのを感じた。気まずい雰囲気の中、ゆっくりと視線をそらすと、大きく、そしてわざとらしく咳払いをする。その咳払いで、ようやくジェシカは開放され、まるで力が抜けたかのように座り込んでしまった。

「だあれ、私の楽しみを邪魔するのは？」

そして口づけの相手がゆっくりと振り返る。

「あらあ。この前の坊や、じゃない？坊やも、私としたいの？」

「けっ、結構だ」

エレイドは慌てて後ずさる。

「相変わらずの偏食のようだな、この悪魔が」

ふと、部屋の外にいたダットが入ってきた。

「あら、失礼ね。今は魔術師よ。どうせ呼ぶなら王国魔術師様と呼んで頂けないかしら、化け猫さん」

目の前の女性がいたずらっぽく笑った。この女性、ジェシカと同じく王国魔術師の一人、テラだ。彼女を一言で表すとしたら、『美人』と言う言葉以外必要ないだろう。褐色の肌。つややかで、流れるような黒髪。全てを飲み込んでしまいそうな、くつきりとした黒い瞳。黄色い法衣の上からでもわかる、スラリとした姿。けれど問題点が二つ。『美人』と言う言葉の前に、『妖艶な』という形容詞がつく事。そしてなにより、彼女も王国魔術師の一員だと言う事実。この二つの事がらが、テラがカイル以上に食えない人物だという事を示していた。エレイド自身はテラとはつい最近知り合ったばかりなのだが、ダットは彼女との付き合いは長いらしい。二人の関係に興味がないわけではなかったが、少なくともエレイドにとっては、テラは距離を置きたい存在であることには違いはなかった。

「落ちぶれたもんだな、お前も。あんな男に使われるなんて」

「あら、それはおたがいさじゃないの？」

そう言いながら、テラが突然エレイドを見たので、視線があう。エレイドは引きつりながらも、微笑んだ。

「いひなりひろいでふゝてら」

まだ彼女の登場のショックから立ち直っていないジェシカが、座りながら抗議の声を挙げた。いきなり酷いです、テラ、と言っているらしい。

「ごめんなさい。あんまりにもジェシカが可愛いから。ほんの挨拶よ。許して」

謝っているはずなのに、謝っているようには聞こえない。

「お前もお前だ。こんなやつが身近にいるのに、身構えておかなく

てどうする」

「そんなあ、ひどおいですゝだつとさあゝん」

エレイドはため息をつき、座り込んでいるジェシカに拾った眼鏡を手渡した。

「まあ、いいですうゝ。ここは水の祠。テラに奪われた魔力ぐらいはすぐ回復します」

眼鏡をかけ深呼吸をし、ようやく少し復活してきたのだろう。

「それにしても、なんでテラがここにいるんですかゝ？」

ふらつきながらも立ち上がり、埃を払いながらジェシカは聞いた。

「この件は…少なくともこの三日は、私に一任されたはずです！」
その言葉にテラはまじめな表情に変わる。

「貴方たちのことは、カイル様から聞いているわ。私がここに来たのは、ある意味偶然。私が用があつたのは、土の祠。まあそこから乱れを追ってきたのは、単なる好奇心だったけど」

「お前は…」

「会つたのですか、テラ」

ダットとジェシカの問いが重なる。テラの顔が不機嫌そうに曇る。

「ええ、会ってきたわ。とんでもないじゃや馬よ？ここから逃げ出さないように閉じ込めてきたけど、油断していたとはいえ、予想外よあの力は」

「予感はあるたつてしまったようですねゝ」

ジェシカがふつと息をついた。突然、テラがエレイドを指差した。

テラに近寄られ、混乱と戸惑いでエレイドは後退する。

「坊や、あなたに、あの子に認められるほどの力があるのかしら？」

「ちよ、ちよつと、待ってくれ。いったいどういう意味なんだ」

テラは大きく目を見開き、口をパクパクさせる。驚きのあまり、言葉が出てこないようだ。そして勢い良くジェシカとダットへ振り返る。

「あなたたち！この坊やに、何も説明していないの？！」

「テラがいきなり出てくるからですゝ」

ダットが床に座り、エレイドをまつすぐと見つめる。

「エレイド、お前はさっき聞いたな。何故、俺たちがあの剣を生き物のように話すのかと。それは魔力によって意思が生まれるからだ」
「意思？」

「エレイドさん、私たち魔術師にとって、魔力を物に定着させることは、命を物に吹き込む事と、同じ意味を持つのです。魔力によって物は意思を持ちます。それは魔術師にしか感じとれないぐらい微妙だったり、エレイドさんのように魔力をほとんど持たない人間でも読み取れる場合もあります。だから私たちは、それを物としては扱いません」

「時と場合によって、意思の強さも違うという事だ。今回の場合、あの剣の魔力はかなりのものになってしまったはずだ。意思だけではなく、自我まで生まれたのでは……？」

ダットの視線はテラへと移る。

「さあ。会ってみての、お・た・の・し・み」

エレイドは前髪をかきあげる。

「でっ、どうすればいいんだ？」

「ふふっ、三つの選択肢があるわ」

「一つ目は、あの剣を壊してしまうことです。生半可に魔力を発散させて〜という事はかなり難しそうですから。やっぱり壊してしまうのが一番簡単な方法でしょう。私としては、却下したい選択肢ですね。折角治ったのに〜もつたないですう〜」

「二つ目は？」

「二つ目は、私たち王国魔術師が保護するという事です。幸か不幸か、テラもここにいます。魔術師が三人もいれば、保護はできますよ」

「だがな、エレイド。名目は『保護』でも、あの剣に『呪いの剣』という紙をはりつけ、厳重にしまいこむ、というのが実際の話だ」
ダットが付け加えた言葉に、ジェシカの顔は不満そうにゆがんだが、何も言わなかった。

「そして三つ目の選択肢。それは坊やが、あの子に認められる事よ。主人として、持ち主として」

不思議そうな顔をしているとテラが続ける。

「知つてのとおり、あれは普通の魔術武器ではないわ。ある意味『呪いの武器』といつても過言ではないでしょうね。たいていの人なら武器に振り回されてしまつわね」

挑戦的に、テラの黒真珠のような瞳がエレイドを見つめる。

「あなたに、あの剣の全てを受け止める力と、覚悟はあるのかしら？」

「お、俺は…」

エレイドが何か言おうと口をあけると、テラがそつとさえぎつた。

「まだ会つてもいない相手に、覚悟やら、力やら言われてもわからないわよね。私は貴方の考えが知りたいの。どうしたい？」

「ったく。選択肢なんてあつてないようなものじゃないか。壊すのはもちろん却下だ。『保護』なんていうのは論外だ。話がだいぶ大きくなってしまったが、もともとあの剣が欲しかったから、ジェシカに修理を頼んだんだ」

その言葉にダットが興味深そうに、目を細める。

「その選択肢があるだけ感謝するんだな、エレイド」

「えっ？」

「相変わらず、察しがわるいわね。カイル様の意図がまだわからないの？」

「どうせ、俺は鈍感だ…」

エレイドが口を曲げると、ジェシカがクスクスと笑う。

「エレイドさんだから、室長は三日間の猶予をくれたんですよ？」

『三日内にこの件を片付けていただければ、その魔術武器の所有を許可しよう』

カイルの言い方をまね、ニツコリと笑う。

「相変わらず、全てお見通しと言うことか…」

「もちろんよ。そうでなければ、王国魔術師のリーダーなんて事を

やっていないわ」

エレイドはテラを、そしてジェシカを見た。

「たしかに…そうかもな」

目の前にいる二人だけでも、かなり個性が強い。そんな二人だけではなく、カイルは五人ものメンバーをまとめあげている。そのうえ全員が奇人、変人が多い魔術師だ。並大抵な実力ではまともらない。とことん食えない人間だな、とエレイドは改めて思った。

「エレイドさん」

「うん？」

「祭壇に行く前に一つだけ。もしエレイドさんが失敗した場合」

眼鏡を通し、ジェシカの瞳がまっすぐとエレイドを見つめる。普段の付き合いではあまり見せない表情だ。

「『保護』、場合によっては『破壊』に移ります。いいですね？」

第六章 水の祭壇

テラは両開き扉の前まで来ると、ふと足を止め振り返った。

「ここを開ければ、術式が途切れるから…覚悟しておいてね」

エレイドはそつと剣の柄に手をかけ、ジェシカは右手に持った杖をギュッと握り締める。その様子を確認すると、テラは右手で右側の扉、左手で左側の扉に触れた。

すると、まるで今まで誰かが扉を無理やり開けようとしていたかのように、乱暴に開いた。同時に襲ってくる、炎の渦。とつさにジェシカはしゃがみ込み、床に手を触れる。途端に、エレイド達を守るように水の壁が床から噴き上げてくる。爆発音とともに、炎の渦も水の壁も消し飛び、あたりは湯気で包まれた。

「くつ剣はどこだ！」

エレイドは辺りを見回すが、湯気の所為で様子がわかりにくい。気配を感じ、振り返り際、剣で受ける。

「なっなんだ？」

相手は人の形をした、炎の剣士だった。押し合う剣からも熱が伝わってくる。

「まったく、暑苦しいんだよ！」

エレイドが勢い良く押すと、炎の剣士がよろけた。途端に剣士は無数の鳥に襲われ、そして消えた。ジェシカの術だ。

「エレイドさん、大丈夫ですか？」

「ジェシカか、すまない」

手袋がまるで火にくべたかのように黒ずんでいる。

「今の一瞬か…。長引くと不利だな。剣はどこだ」

「石版のところだ！」

ダットに言われ、石版の方向を見る。たしかに湯気の中、古めかしい緑の甲冑を着た人影が立っている。良く見ると、あの剣を腰にさしている。顔は兜を被っているため見えない。エレイドは思わず走

り出しそうになる。その気配に甲冑が気付いたのか、甲冑が右手を挙げた。また何もない空間から、剣士がつぎからつきへと現れる。跪いた状態から、ゆっくりと立ち上がる剣士たち。今度は炎だけではない。

「炎、木、水、金、土。マジかよ…」

うんざりしたように、エレイドはため息をついた。

「エレイド！あいつらは雑魚だ。俺たちに任せればいい」

「あなたは剣のところに行つて。きっとあの子も待っているわ」

エレイドはテラとダットの顔をじつと見つめた。

「エレイドさん！」

「よしっ、やるか！」

その声とともに、エレイドは床を蹴った。まるでその声が合図だったかのように、属性の剣士たちも襲い掛かってきた。ジェシカの鳥たちは空中から襲い掛かり、テラの蝶は舞うように剣士たちに取り付く。ダットの鎖はまるで生きているかのように伸びていく。『攻』の術は、術者の本質に一番近い形になるらしい。ジェシカの場合、それは『鳥』で、テラは『蝶』、そしてダットは『鎖』だった。エレイドはそんな術の姿を横目で見ながら、立ちふさがる剣士たちをむりやり切り倒していく。そしてようやく甲冑の前までたどり着くと、足を止めた。

甲冑はエレイドの姿を確認すると、ゆっくりと剣を抜き、構えた。今では珍しい古めかしい構えだ。剣はエレイドが記憶にあるものとは、まるで別物だった。記憶の中の剣は、いたるところに刃こぼれがあり、錆びつき、ただの古びた剣でしかなかった。でも目の前にあるものには刃こぼれも錆びも見当たらず、刃はまるで鏡のように磨かれ、装飾はあまりないものの、『美しい』という言葉が自然と思ひ浮かぶほど、洗練された姿に生まれ変わっていた。

「うわっ」

エレイドが見とれているを見逃さず、甲冑は一気に間合いを詰め、切りかかってきた。剣と剣がぶつかりあい、火花が散る。

『お師匠様！』

エレイドの頭の中に声が響く。まだ声変わりもしていない、少年の声。驚きと油断でエレイドの動きが一瞬、鈍った。

「つつつ」

甲冑の剣がエレイドの左腕をかする。深い傷ではない。それでも傷口から生暖かいものが流れるのを感じる。甲冑は手を緩めることなく、打ち込んでくる。

「くそつ」

『これ、勝手に触るんじゃない』

『これが今のお仕事ですか？』

剣が交じあい、火花が散るたびに聞こえる声。今度は大人の声も聞こえてくる。少年の声とは対照的に、しゃがれた、老人の声。目の前をちらつく姿。ばやけているので見えないが、存在をはっきりと感じる。エレイドは力いっぱい剣を相手に叩きつける。

「一体なんなんだよ?!」

甲冑はエレイドの問いには答えない。代わりに剣線はもっと鋭く、そしてもっと早くなる。集中できない中、攻撃を避けるのは簡単ではない。傷がだんだん増えていく。

『お師匠さま？お師匠さま？そんな…嘘だ！嘘だ嘘だ！』

『だったら僕が…！僕が代わりに！』

エレイドは甲冑の剣を跳ね除けた。けれど甲冑は反発を利用し、新たに切りつけてくる。一瞬反応が遅れ、今度は左の太ももをかする。エレイドは思わず膝をついた。甲冑は一步一步、踏みしめるかのようにならぬようにエレイドに近づく。エレイドはじつと甲冑を見据える。けれども甲冑は無表情のままだ。左の太ももが熱く、そして疼く。思ったより深い傷なのかもしれない。足はまるで麻痺してしまったかのように、動かない。エレイドは唇を噛み締めた。避けられない。そんなエレイドの考えを知ってか知らずか、甲冑はゆっくりと剣を振り

上げた。

突然、あたりの風景が歪んだ。まるで混ざり合う絵の具のように、全てが溶け合っていく。そしてまた、大きくなる少年の声。

『お師匠様．．？』

今度は、はつきりと見えた。横たわる老人の傍で、呆然と立ち尽くす少年。少年は慌てて老人に駆け寄り、老人の身体をゆする。

『お師匠様！お師匠様！！お師匠様！！』

でも老人の返事はない。

『嘘だ！嘘だ！嘘だ嘘だ嘘だ！』

エレイドはおもわず耳をふさいだ。少年は無表情のまま、老人の傍に座り込んでいる。口を動かす様子はない。けれど、声だけがエレイドの頭の中をこだまし、だんだんと大きくなる。

突然、声がやんだ。ふと見ると、老人と少年の姿はない。代りに机が現れ、その上には作りかけの剣が置かれている。そしてまるで剣に群がるかのように、黒い影が机を囲んでいる。

『剣に触るな！』

少年の声に影達の動きが一瞬止まる。けれどすぐにまた動き出す。

『お師匠様の代わりは、僕がする！だから触るなあ！』

少年はもう一度叫んだ。力強い声は、空間を震わせ、影達は消し飛んだ。少年が現れ、机にゆっくりと近づく。そしてそっと剣の鞘に触れ、静かに微笑んだ。

『我八守レナカッタ』

エレイドの頭の中に声が響いた。

「えっ？」

辺りを見回す。けれど、誰もいない。少年もそして机もまた消えていた。

『我八主ノ笑顔ヲ守レナカッタ』

その瞬間、少年の映像が溢れんばかりに頭の中に流れ込んでくる。

「くっ！」

エレイドは唇を赤くにじむまで噛み締めた。次から次へと入ってくる膨大な情報に気が狂いそうになる。少年の笑顔、悲しんでいる顔、怒っている顔。まるで実際見ているかのように鮮明な映像。

『創造主ノ想イニ応エラレナカッタ』

今度は老人の姿も見える。鋭い鷲のような目をした老人。そんな老人の傍を離れようとしないう少年。成長していく少年とは反対に老いて行く老人。そして…。

少年が女性に庇われるように現れる。女性の手にはあの剣が握られている。何かから逃げている、そんな感じがする。二人は走っている。突然女性が足を止めた。少年は驚いて、女性に駆けよった。女性はずかに微笑み、少年の髪をなでる。そして、突き飛ばした。少年が暗闇に消える寸前、エレイドは少年の叫び声を聞いたような気がした。いや、それは自分の叫び声だったのかもしれない。気がつくのと、女性の後ろには無数の影がいた。人間、のようにも見えるが、それは黒くぼやけてはつきりと形をつかめない。女性は剣をギュッと握り締め、果敢に切りかかっていく。動きを見るだけでも、彼女の剣術がかなりの物だという事がとってわかる。彼女は襲い掛かってくる影を切り伏せ、まるで少年が消えた方向を守るかのように、影達の前に立ちふさがる。終わりのない攻撃にも、彼女は息を乱さず立っている。

永遠に続くかと思われた攻防戦の終わりは突然、訪れた。目に見えるほどハッキリとした物ではなかった。一瞬、彼女がバランスを崩した。ほんの一瞬。でも影の一人はそれを見逃さなかった。立て続けに剣を打ち込む。防戦一方となったが、それでも彼女は華麗に攻撃を避けていた。そして避けきれず、攻撃を受け流そうと、剣で受け止めた時だった。剣が、砕けた。相手の剣は止まらず、まるで吸い込まれるかのように、女性の身体を貫いた。女性は一瞬のうちに影に包み込まれ、そして消えた。残されたのは、二本に折れた、あの剣だけだった。

「そつか。お前、悔しかったんだな」

ふとエレイドは今までの事を思い出していた。ジスタルでの依頼が終わり、なんとなく市場を歩いているときだった。ちょうど感謝祭と重なったためか、普段より多くの露天商たちが店を出していた。そして数々の露店の中、たまたま入った店に、あの剣は売られていた。

『コレハ我ノ罪』

見た目はただの、古い、ボロボロな剣。あちこちがさび付いていて、それにくわえて、二本に折れていた。普通なら買おうと思うような代物ではない。

「お前はとうしたい？」

それが魔術武器だとは知らなくても、エレイドは直感的に何かを感じていたのかもしれない。剣から目を離すことは出来なかった。

『我ハ…許サレタイ』

依頼の報酬が入ったばかりとはいえ、揭示されていた剣の値段は高かった。普通だったなら諦めたかもしれない。でもエレイドは諦め切れなかった。

『汝ハ我ノ罪ヲ許スノ力？』

エレイドは店の主人に頼み込んだ。そして主人はエレイドの熱意に負けたのか、値段をかなり下げてくれた。そうしてエレイドは剣を手に入れた。

「俺に罪を許す事は出来ない」

宿屋に帰ると、珍しい事にダットが剣に興味をしめしたのだ。普段なら『人間の武器なんて…』、と何かと小ばかにしたような目で見つめる彼だったが、丹念に調べるように剣の周りを歩き回り、そして一言つぶやいた。『魔力がある』と。

「けれどお前の罪を背負ってやる事はできる」

エレイド達はジェシカを尋ねたのだった。そして起こったのが今回の騒動。テラの言葉が蘇る。

『そして三つ目の選択肢。それは坊やが、あの子に認められる事よ。主人として、持ち主として』

『我ノ罪ヲ背負ウダト？』

『あなたに、あの剣の全てを受け止める力と覚悟はあるのかしら？』また、テラの声が聞こえる。エレイドは静かに微笑んだ。いや、苦笑した、というほうがあっているのかもしれない。剣が見せた映像。それ全てがエレイドが剣に惹かれた理由だった。

「ああ。お前の悔しい想いも、さびしい想いも、悲しい想いも。全て、全て俺が背負ってやる」

張り詰めていた空気が消え、やさしくなったような気がした。まるで剣が微笑んでいるような気さえした。

『我、汝ヲ主ト認メヨウ』

エレイドは無意識のうちに剣を突き出していた。切っ先は空を切り、鎧にあたる。『カッン』鉄同士がかすかにあたる音がした。普通だったら意味のない小さな音。普通だったら聞こえないようなかなさな音。そんな音が水の祭壇に響いた。

まるでそれが合図だったかのように、辺りが静まり返る。

「勝った」

普通だったら考えられない状況。でもすべて普通とは言いがたかった。そんな中、エレイドは自分の勝利を実感していた。切っ先が当たった箇所からゆっくりとひびが入っていく。そして鎧は砕け散った。エレイドはとっさに伏せる。頭上を飛び散っていく破片。状況がおさまり、エレイドはゆっくりと頭を上げた。鎧があった場所にはあの剣が浮かんでいる。恐る恐る手を伸ばし、鞘に収まった剣に触れてみる。すると剣は重力に逆らうのをやめ、エレイドの手に滑り込んだ。

「『チャージ』？」

「ナルガ語で、『誓い』と言う意味ですよ」

「えっ？」

振り返るとジェシカ達が立っていた。

「誓いか…」

「まったく、そんな名前つけるから、こんなじゃじゃ馬になるのよ…」

そう言いながら、テラは先ほどの戦いで付いたらしい埃を服から払っている。そんなテラの横、毛づくろいを終えたダットが、エレイドをじつと見ているのに気付いた。

「なんだよ」

「別に」

そんな答えにエレイドは苦笑した。まったく、この猫は何を考えているのか、わかりやしない。

「一つだけ覚えておく事ね」

そんな事を考えていると、テラが話しかけてきた。

「貴方が剣を使うか、貴方が剣に使われるかは、全て貴方しだい。」

『チャージ』の力は、見たでしょ？」

エレイドはじつと剣を見つめた。そして静かに笑うと髪を掻き揚げた。

「まあ、せいぜいがんばるよ」

そんな様子にテラも眉をひそめながらも笑った。

「そういえば、ジェシカ。間に合うのかしら？」

「えっ？」

テラの問いにジェシカは間の抜けた顔をする。

「休暇、今日までだったでしょう？」

「えっあと一日…？」

ダットは呆れたように、首を振った。

「バカ、お前気付いていなかったのか？ここの空間はかなり歪んでいたぞ」

「まさか…」

ダットの言葉にジェシカの顔から血の気が引いていくのが、見ているだけでもはつきりとわかった。

「今、時刻は！」

「そうね。正確にはわからないけど、夜？もう明け方かしら？」と、テラはいたずらっぽく答えた。

「うそおお！！」

「坊や、私たちは行きましょう？肩かしてほしいかしら？」

そう言つて、テラはエレイドに手を差し伸べる。

「すまない、頼む…」

疲れきり、満身創痍なエレイドは素直にそう答えた。

「ええ！テラ、手伝ってくれないのですか？」

「だって私、『土』の魔術師だし。この通り、坊やも怪我だらけだし」

微笑をうかべながら、テラは答えた。

「なんで、そんな嬉しそうなんですか？！ダットさん！」

今度はダットをすぎる様に見つめる。

「俺は生憎、王国魔術師ではない。ついでに物質の構築は苦手だ」

「そんなあ」

出口に向つテラはふと足を止め、エレイドを支えたまま振り返った。

「そろそろ片付け始めないと、遅刻するわよ」

「うわ。仕事。遅刻。片付け。あわわ」

慌てふためくジェシカを横目に、テラは再び歩き出す。

「じゃあ、がんばってね、ジェ・シ・カ」

「裏切り者！！」

エピソード

扉についている鈴が元気良くなり、威勢のいい声と共に一人の青年がギルドに入ってきた。

「っちわーすっ！」

厨房から親父さんが顔をのぞかせる。

「おや、アレン。戻ったのか」

「依頼もこの通り」

自慢げに、依頼書をカウンターに置く。ギルドの依頼は、依頼を達成し、依頼主の署名を貰えば達成となる。そして報酬はギルドのほうから支払われる。

「たしかに。ほら、報酬だ」

「あつざーす」

エレイドがそんなやり取りを見守っていると、アレンがエレイドたちに気付き、近づいてきた。

「エレイドさん、どうも」。ナークから聞きましたよ？俺がちょっと遠出している間、大活躍だったみたいじゃないですか！新しい剣も手に入れたと聞きましたし！」

目を輝かせながら、エレイドたちのテーブルに座る。こいつは元気がいいのが取り得なのだが…ちょっと、良すぎる事が多い。

「ああ…」

「どうしたんですか？浮かない顔して？」

「今回の騒動でだいぶ金を使う羽目になったからな、財布の中身がかなり乏しくて。ついでに、仕事も乏しいときた」

そして『チャージ』に目をやる。頭の痛いことばかりだ。そう心の中で付け加え、エレイドはジョッキを口に運ぶ。ちょうどその時、ギルドの主人がアレンにもジョッキを運んできた。

「親父さん、そうなんですか？」

アレンはビールを受け取りながら、ギルドの主人に不思議そうに聞く。

「珍しく、少し暇だな。いま残っているのは、来たばかりの新人二人用にとつてある、小さな仕事が一、二。あつ、いらつしやい！」苦笑しながら主人は、客が来たためカウンターに戻った。一瞬、依頼人かと思つたが、ただ食事をしにきただけらしい。

「はあ…」

「うーん。あつ、そういえばエレイドさん、城で剣術指南やつてたんじゃないですか？」

「バーンが復歸して、俺はお役御免」

「あつ、じゃあ研究室での素材集めは？」

「しばらくは発表の準備で忙しいから、必要ないつてさ」

「じゃあ、もうダットさんで見世物やるしかないつすね」

その言葉に、テーブルの上に寝そべっていたダットが突然起き上がり、毛を逆立てた。アレンも飛び上がるように立ち上がる。

「う、うわ。冗談ですつて。冗談！」

ダットがまた丸くなったのを見ると、アレンは恐る恐る座つた。

「ふう。生きた心地がしなかった」

「お前もお前だ。こいつを怒らせるようなことを言うんだから」

エレイドは笑いながら頼杖をつく。

「この際、報酬はいくらでもいいけどな。けど新人のあいづらの仕事を取るわけにも行かないし…お前、なんか情報ないか？」

「う…ん」

少し考えこむと、アレンは突然何かを思いついたように指をならした。

「そつだ、ミラへ行つて見たらどうです？」

「ミラつて港町のか？」

「依頼の途中、寄つたんですけど、人手不足みたいで…。掲示板も依頼で埋もれていましたし、あそこのマスターもかなり忙しそうでしたよ。帰日も三日前に寄つたんですけど、あんまり変わった様子は

なかつたな。」

「確かに、そこだったら仕事にありつけそうだな。行ってみるか？」
ダットが面倒そうに小さく鳴く。これは一応賛成の返事。隣のテーブルの食器を片付けながら、会話が耳に入ったのか、主人が口を挟んできた。

「ミラでそんなに人手不足とは初耳だな…。ミラのギルドマスターは…」

ふと相手の顔を思い出したのか、主人の口もとが笑みに変わる。

「…あいつか。エレイド、行く気だろ？ちよつと待ってる。あいつとは付き合いが長い。紹介状書いてやる」

汚れた食器を持って、厨房へ消える主人を目で追いながら、エレイドは残ったビールを一気に飲み干した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7600m/>

炎の魔剣

2011年2月5日17時27分発行